

平成4年度厚生省心身障害研究
「親子のこころの諸問題」

学習障害児9症例にみられる幼児期の問題
学習障害児の早期発見に向けて
(分担研究：学習障害にたいする基礎的研究)

大石敬子

要約：学習障害児と診断され、その神経心理学的障害が明らかになっている9症例の診断の時期、診断までの経路、幼児期に示した発達上の問題を調査した。学習障害と診断された年齢は4歳から9歳にわたり、診断にいたる経路は教育機関経由が多かった。幼児期に示した問題は学習障害のタイプにそれぞれ特有な性質を持つものであり、これらを指標として幼児期に学習障害児を発見することは可能であるが、そのためには発達についての詳細なスクリーニングが必要であることが示唆された。

見出し語：学習障害，早期発見，発達障害

研究目的：学習障害は中枢神経系の成熟の遅れないし障害をその発生要因とすると言われている。しかし学習障害児の発見時期は主として学童期である。発生要因を中枢神経系の問題にもつかぎり、幼児期にすでになんらかの発達上の問題をもっていることが考えられる。学習障害児の早期発見のためのスクリーニングの一助とするために、既に学習障害として診断され、指導をうけた子供がその幼児期にどのような問題をもったかをさかのぼって調査することが本研究の目的である。

研究対象と方法：学習障害児として既に診断され、学習障害のタイプや学習上の問題点が明確にされている9症例について、(1)診断時期、(2)診断経路、(3)幼児期にみられた問題について調べた。なお、対象とした症例の選択の基準は次のようであった。

a. 知的発達にくらべて特定の学習領域の発達が特異的に遅れる。

b. 学習の遅れを環境要因、意欲の問題、情緒・社会性の問題に帰することができない。
c. 学童期に数年にわたる指導が行われ、子供がもつ神経心理学的問題がある程度明確にされている。

なお、対象児の概略を表1にする。

調査の方法は、対象児にたいする各種の検査(発達検査、神経心理学的検査、学力検査)の実施と家族の問診であった。

結果：学習障害は単一疾患群ではなく、複数のことなる性質の障害を含み、それによっていくつかのサブグループに分けられる。本研究の対象9症例は言語性読み書き障害(5例)、視覚性読み書き障害(2例)、構成行為障害と算数障害の合併(2例)を含んだ。この9例が学習障害として診断されたときの年齢は、図1のごとく就学前(4歳-5歳)3名、就学後(6歳-9歳)6名であった。診断にいたるまでの経路は9例のうち5例が区や市の教育研究所経由であった。日本国外で診断を受けた1例をのぞき、医療機関を訪れて学習障害について相談しあるいは診断をうけた

症例はなかった。なお、これら9例のうち4例はてんかんなどの治療の目的で長期にわたり小児科などに通院していた。

幼少時期にもった発達上の問題は学習障害のタイプによって異なった(図2)。言語性読み書き障害では言葉の問題が全例にみられた。視覚性読み書き障害では不器用、絵をみない、絵が描けないが2例に共通してみられた。構成行為(算数障害合併)では不器用、絵が描けないが2例に共通した。多動を中心とする行動上の問題は、3タイプに共通してみられた。

学習障害の中核的存在であり、発生頻度も高い言語性読み書き障害児は全例に共通して、幼児期に言葉の問題があった。その内容を調べると、(1)言葉の発達は遅れ気味であったが、そのことを主訴に指導機関を訪れるほど大きな問題ではなかったこと、(2)5例中4例に共通して語彙の問題があったことが明かとなった(図3)。

図1 学習障害と診断された年齢とそれまでの経路

タイプ	診断時年齢	診断までの経路 (☆診断場所)
言語性 読み書き 障害 (5名)	4歳 1名 6歳~9歳 4名 小1(小3)	教育研究所→多摩療育園☆ 5名 多摩療育園☆ 2名
視覚性 読み書き 障害 (2名)	5歳 9歳(1.2)	病院内学級→多摩療育園☆ 1名
構成行為 障害 算数障害 (2名)	4歳 6歳(1.1)	米国 こども病院☆ 1名

図3 言語性読み書き障害児の幼児期の言葉の特徴

1. 日常会話に支障ない。
2. 同年齢の子供に比べ言葉が遅いことは気づかれているが、そのことを主訴に相談機関を訪れたケースはない。
3. 5例中4例に共通して語彙の問題がある。
 - イ. 語彙の発達が遅れる。
 - ロ. 人名、地名、色名、挨拶語等を覚えられない。
 - ハ. 呼称の誤りがある。
- 二. 聴覚的記憶のスパンが短い。

考察：1. 学習障害児としての診断時期は4歳から小学校低学年にわたっていた。診断までの経路は教育機関経由が多く、医療機関でのケアは受けていなかったことが示された。多くの症例が他の目的で長期にわたり医療機関を利用してはいたにもかかわらず、学習障害については ケアが及んでいなかったことは、医療関係者に学習障害についての認識がまだ十分にゆきわたっていないことを示唆する。

2. 学習障害児が幼児期に示した問題は学習障害のタイプによってことなり、各タイプ特有の問題をそれぞれ示した。これらの問題を指標に幼児期に学習障害児を発見することが可能であると思われた。ただ問題の中味は言語性読み書き障害に見られるごとく、詳細な検査によって初めて抽出されるような、発達上の微細な片よりであった。学習障害児の早期発見のためには、これら微細な問題を抽出できるような詳細なスクリーニングが必要であることが示唆された。

図2

幼少時期に気づかれた問題

言語性読み書き障害(5名)	
ことばの問題	5名
多動	1名
集団のルールを守らない	1名
視覚性読み書き障害(2名)	
多動、落ち着きない	2名
不器用	2名
絵をみない、見てもわからない	2名
絵が描けない	2名
ことばが不明瞭	1名

構成行為障害(2名)

不器用	2名
絵が描けない	2名
落ち着きない	1名
行動が唐突で友達に嫌われる	1名

表 1

学習障害児9例の概略

症例	性	初診年齢 現年齢	学習障害のタイプ	生育歴	病 名	知能検査 (検査時年齢) 言語性 (VIQ)・動作性 (PIQ)
1	男	6 (小1) 22 歳	言語性読み書き障害	正常産 始歩 1:6 始語 2:0	心室中隔欠損 (2歳手術)	WISC (6.6歳) VIQ 74 PIQ 108
2	男	9 (小3) 13	言語性読み書き障害	正常産 始歩 1:0 始語 1:2		WISC (9) VIQ 102 PIQ 113
3	女	7 (小1) 11	言語性読み書き障害	正常産 定頸 0:3 始語 0:10	てんかん	WISC (7) VIQ 97 PIQ 98
4	男	8 (小3) 11	言語性読み書き障害	正常産 始歩 1:3	遠視, 乱視	WISC-R (8) VIQ 100 PIQ 112
5	男	7 (小2) 10	言語性読み書き障害	正常産 始歩 1:6 始語 1:0		WPPSI (4) VIQ 60 PIQ 81
6	男	5 (幼) 9	視覚性読み書き障害	切迫流産, 新生児ケル 始歩 1:6 始語 1:6	てんかん	WISC-R (8) VIQ 95 PIQ 51
7	男	9 (小2) 9	視覚性読み書き障害	極小未熟児 (双胎) 始歩 1:6 始語 1:6 (転輪)	遠視, 左不同視弱視 左外斜視	WISC-R (9) VIQ 91 PIQ 52
8	女	4 (幼) 11	構成行為障害 (含書字 障害), 算数障害	正常産 始歩 1:3 始語 1:0	てんかん, 内斜視	WPPSI (5) VIQ 105 PIQ 51
9	女	6 (小1) 10	構成行為障害 (含書字 障害), 算数障害	正常産 始歩 1:2 始語 1:0		WISC-R (6) VIQ 84 PIQ 48



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学習障害児と診断され、その神経心理学的障害が明らかになっている9症例の診断の時期、診断までの経路、幼児期に示した発達上の問題を調査した。学習障害と診断された年齢は4歳から9歳にわたり、診断にいたる経路は教育機関経由が多かった。幼児期に示した問題は学習障害のタイプにそってそれぞれ特有な性質を持つものであり、これらを指標として幼児期に学習障害児を発見することは可能であるが、そのためには発達についての詳細なスクリーニングが必要であることが示唆された。